

郷土資料にみられる子どもの自然遊びと保育内容「環境」への活用

Traditional plant usage and playing in local materials, and application for childcare content “Environment”.

富田 宏・横井喜彦・平中 学

Hiroshi Tomida, Yoshihiko Yokoi and Manabu Hiranaka

要 約

郷土資料にみられる子どもと自然環境の多様な関わりとその地域性を保育の実践や保育士を育成するための学びに活用することを目的に、「蛭川のくらしとならわし（蛭川村文化財審議会編，1984）」とその直筆原稿を対象として記述内容を精査した。その結果，直筆原稿の挿絵等から方言名で記述された動植物名と標準和名の対応が明らかとなり，また具体的な遊びや工作の実態が明らかとなった。

郷土伝承の遊びと工作として本書に記述された計65件の項目について分析した結果，郷土資料に記述された子どもと自然環境の関わりの特徴として，1）草花遊びとともに「食べる」という行為を通じた自然環境との関わりが多くみられること，2）身近な植物を工夫して利用し魚類や鳥類を捕獲する行為が示されていること，3）当地における子どもと自然環境との関わりには東海丘陵要素を含む地域に固有な植物が利用されていることが明らかとなった。

郷土資料に見られる子どもと自然環境の関わりを参照することで，保育の実践と地域の自然環境や文化との新たなつながりを見出すことが可能となり，地域社会の文化や伝統を守る拠点としての保育所や幼稚園の構築に向けた取り組みに貢献すると考えられる。また保育士を養成するための学びにおいては，郷土資料を活用することで関心を持つ地域の自然環境の特徴や伝統的な子どもと自然環境の関わりを自ら解き明かし，実践するという取り組みが可能である。今後，里山保育が実践する地域の自然資源の活用，そして散歩における地域との関係づくりといった実践を例として，郷土資料の活用に向けた議論が必要である。

キーワード：保育領域環境，郷土資料・草花遊び・東海丘陵要素

I. はじめに

幼稚園教育要領には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに“自然との関わり・生命尊重”が掲げられており，「自然に触れて感動する体験を通して，自然の変化などを感じ取り，好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら，身近な事象への関心が高まるとともに，自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また，身近な動植物に心を動かされる中で，生命の不思議さや尊さに気づき，身近な動植物への接し方を考え，命あるものとしていたわり，大切にする気

持ちをもって関わるようになる」と記されている（文部科学省，2017）。

こうした子どもと自然環境との関わりを生む活動として，例えば保育現場において動植物の飼育（山下・首藤，2009），栽培（富永・錦織・飯國・川野・地下，2018），ビオトープの造成（大仲・笹井・田中・西村・新田・井上，2021），草花遊び（佐藤・藤野，2012）等の活動実践が報告されている。しかし，これらの報告において子どもと自然環境の関わりにおける地域的な固有性については論じられていない。

地域の自然環境は生態学的過程の結果であるとともに、そこに暮らす人々の営みと自然環境の相互関係によって形成され、多様性とともに固有性を有した存在である。しかし、幼児期の自然との関わりにおいて、地域に暮らす人々の営みと自然環境とのつながりや、自然環境の地域的な固有性については十分に議論されてこなかったといえるだろう。近年、幼児教育においてもSDGsに対する関心の高まりを受け、地域社会の文化や伝統を守る拠点としての保育所や幼稚園が担う機能が大きくなっていることが指摘されている（谷口, 2020）。こうした現状から、地域に暮らす人々の営みと自然環境の相互関係、そして地域的な固有性をもった自然環境を、どのように幼児教育や保育に取り入れていくかが今後課題になると考えられる。

地域における人々の暮らしと自然環境の相互関係を包括的に捉える手法として、地域住民のナラティブや文献資料に基づいて伝統的な生態学的知識を明らかにするアプローチが試みられている（高橋, 2022. 盛口・当山, 2020.）。しかし、文献資料において方言が使用された記述がある場合は標準和名等の一般的に理解される言葉への言い換えが必要である。また、ある行為や作成物が文章のみで説明されている場合にはその実態を検証することが必要である。

筆者が岐阜県東濃地域の郷土資料を調査する中で蛭川のくらしとならわし（蛭川村文化財審議会, 1983）の直筆原稿が蛭川郷土資料館に所蔵されており、そこには刊行された書籍には掲載されていない著者によるカラーの挿絵や、注釈が記述されていることが確認された。本稿では、蛭川のくらしとならわし（蛭川村文化財審議会編, 1983）を対象として、直筆原稿を参照しながら、方言名や子どもと自然環境の多様な関わりとその地域性について明らかにする。そして保育園、幼稚園、子ども園における子どもが自然環境と関わる活動において、また保育者を育成する養成校における保育内容「環境」と関連する学びにおいて、郷土資料に見られる子どもと自然環境の多様な関

係やその地域性をどのように活用することができるかについて検討していく。

II. 材料と方法

本研究では蛭川のくらしとならわし（以下、本書と記載）を用いて、岐阜県蛭川町における子どもと自然環境との多様な関わりを明らかにする。本書は昭和58年に蛭川村教育委員会より刊行された書籍である。岐阜県中津川市蛭川町（旧蛭川村）は市の西部に位置する。ヒトツバタゴ（*Chionanthus retusus* Lindl. et Paxton）やシデコブシ（*Magnolia stellata* (Siebold et Zucc.) Maxim.）、ハナノキ（*Acer pycnanthum* K. Koch）といった東海丘陵湿地に固有な植物の自生地としても知られている。

本書における地域伝承の遊びと工作の章を執筆した人物は、旧蛭川村の村史編纂に貢献した小川壮二氏（以下、著者と記載）と本文中に明記されている。著者は明治30年（1897年）生まれであることから（蛭川町郷土資料館 私信）、この文献に記述された子どもの遊びは明治後期から昭和40年代前半にかけて蛭川町で子どもたちが行っていた遊びの一部だと考えられる。しかし、本書で著者が「この収録にあたって加古里子〔日本伝承の遊び〕からいくつかヒントを得ました」と明記しているように、本書が執筆された時点で書籍等によって広く知られるようになっていた草花遊びも含まれている（参照：加古, 1964）。

本書には植物等の種名が方言で記述されているものや、記載された植物の種名が特定できないものが複数あった。そこで、直筆原稿の挿入画やメモ書き、また蛭川郷土資料館職員による蛭川町の方言や自生する植物についての助言に基づいてこれらの推定を行った。植物の標準和名は岐阜県植物史（岐阜県植物誌調査会編, 2019）を参照した。

渋谷・藤吉（2006）は、市販の児童書や神奈川県西部地域の市町村史を対象に草花遊びの収集を行い、219種の植物の使用、857種類の草花遊びを報告している。そして、収集した草花遊びをその特徴から、「勝負遊び」、「飾り遊び」、「創作遊

び」,「音遊び」,「おもちゃ遊び」,「ままごと遊び」の6種類に区分している。そこで本書の郷土伝承の遊びと工作の章に記載された遊びや行為を,上記の渋谷・藤吉(2006)による草花遊びの6区分を適用して分類した。そして,これらの項目に該当しないものを「その他」とした。

Ⅲ. 結果

本書の郷土伝承の遊びと工作の章には,65件の子どもの遊びが記述されており,そのうち62件が栽培種を含む植物と関連する記述だった。その他は植物と関係しないもので,2種の昆虫類(スズメバチの仲間,コガネムシの仲間)の捕獲,ハマグリ貝殻の利用,魚類の捕獲について言及された記述がそれぞれ1件ずつあった。本書には種名が特定できなかったものを除き59種の植物名が挙げられており,その利用方法を渋谷・藤吉(2006)が行った草花遊びの区分に基づいて分類した(表1)。その結果,38種が草花遊びの6区分の利用に該当した。一方で,23種の植物は上記の区分に該当しなかった。その内訳をみると,「食べる,蜜を吸う」の対象となる植物が最も多く20種,植物を他の目的を達成するための道具として使用することについてが3件(「捕獲した魚を刺すときに使う(スズメノテッポウにトトサンという俗名を与えていることが説明されている。しかし実際にスズメノテッポウが使用されたかは確認できず他のイネ科草本を使用した可能性がある)」、「魚を釣る際に使う(ヨシの葉を取り除き,茎の先に餌となる虫を巻き付けると針がなくても魚が釣れることが説明されている)」、「鳥を捕獲する際に使う(トリモチを使ってメジロ等の鳥類を捕獲する方法について説明されている)」)挙げられていた。

Ⅳ. 議論

本研究から,本書に記述された子どもと自然との関わりとして植物を使った遊びとともに,食べるという行為が多いことが確認された。これは「菓子などのなかったせい,昔の子供は,山野

の草木,木の実などを食べた。」という本書の記述があるように,本書が書かれた時代背景を反映した可能性が考えられる。一方で,例えば本書にはチガヤ(方言つんばな)についての記述で「つんばな食って実ィ食って,つんばなの殻で屋根葺いて」の歌もあったと書かれている。この歌は岐阜県土岐市肥田町における聞き書きでもまったく同じ歌が記録されており,明治39年生まれの話者は友だちと楽しく歌いながらチガヤを食べたことを語っている(土岐市肥田町道徳推進協議会,1992)。従って,少なくとも明治後期以降に岐阜県東濃地域に広く子どもがチガヤを食べる行為が見られ,食べるものがないからという理由だけで口にしたのではなく,子どもの季節の楽しみであったと考えられる。こうした食べるという行為は保育現場において作物の栽培を通じて行われることが多い。本稿で明らかになったように,郷土資料に見られる子どもと自然環境の関わりにおいて食べるという行為はその中心的なものである。こうした視点を保育の中に取り入れていくための工夫について議論が必要といえよう。またこの他にも,本書にはスズメバチの仲間(俗名 アカバチ)を捕獲するという記述があった。これは蛭川町をはじめ岐阜県東濃地域ではハチの幼虫を食べる文化があることを背景としてと考えられる。また,植物を使って魚を捕(ヨシ),鳥を捕(モチノキ)といった記述が1件ずつ見られた。

本書と同じ蛭川町(旧蛭川村)における子どもと自然との関わりについて記述された書籍に「集落のくらし-むらづくり活動から-(蛭川村,1983)」がある(以下,集落のくらしと記載)。集落のくらしは,蛭川村に暮らす複数の人物の短い語りから構成されている。子供の遊びという章では,お医者さんごっこをはじめ,様々な子どもの遊びが挙げられている。その中で,林松幸氏による「昭和25年頃から昭和30年頃,小学校に入学するまでの頃の子供の遊び」について記述された文章において,本書と共通する遊びは杉鉄砲,モチノキを使った昆虫の捕獲,鳥類の捕獲,魚の捕獲の4件だった。このことから,生き物を捕獲

郷土資料にみられる子どもの自然遊びと保育内容「環境」への活用

表1. 「蛭川のくらしとならわし」の郷土伝承の遊びと工作の章に記述された植物名とその利用方法.

種名/分類名	方言名	使用部位	勝負遊び	飾り遊び	制作遊び	音遊び	おもちゃ遊び	ままごと遊び	その他
1 ツバキの仲間		花		首輪					
2 チガヤ	つんばな	根							食べる
3 タンポポの仲間		茎			水車・風車				
4 コシ		地上部			弓				釣り竿
5 オオバコ		葉						人形の頭	
6 マツの仲間		葉	カ比ベ				水雷艇		
7 マメの仲間		葉				破裂			
8 スミレの仲間	たろう じろう	地上部	カ比ベ						
9 タカノツメ	いもぎ	幹			刀				
10 ホオノキ		葉			風車				
11 アサガオの仲間		花				破裂			
12 ササの仲間		葉				吹く			
13 ムギの仲間		葉				吹く			
14 ゼンマイの仲間	ぜんた	地上部		巻く					
15 ススキ		葉					飛ばす	髪結い	
16 スズメノテッポウ	ととさし	地上部	丈比ベ						魚を刺す
17 カヤツリグサの仲間	ますくさ(升草)	茎			升の形				
18 イモの仲間		葉		お面					
19 イネの仲間		葉						髪結い	
20 タケの仲間		幹			竹馬・水鉄砲				
21 イチョウ		葉			押し葉				
22 ヤマブキ		茎			鳥居				
23 セキショウ		茎					目はじき		
24 チカラシバ		穂			毛虫		足を書ける罌		
25 アザミの仲間		花					花から虫が出る		
26 ゲンゲ	れんげ	花			毬				
27 ハハコグサ		花			毬				
28 メダケ	こばしたけ	幹			鉄砲				
29 オミナエン		地上部					バランス		
30 コナラ	そだめ	殻斗						お椀	
31 ナラの仲間		堅果			笛				
32 エノコログサの仲間		穂		口ひげ					
33 ホオズキ		実			吹上げ毬				
34 ヤマイモの仲間		種子		鼻に付ける					
35 コウヤマキ	こくさまき	虫癭						人形の頭	
36 カキノキの仲間		葉						人形の着せ替え	
37 ヤドリギの仲間	ほやまめ	実							食べる
38 ユリの仲間		花				破裂			
39 ウツボグサ	かんたまくら	花							蜜を吸う
40 ツメクサ		花			花飾り				
41 モモ		樹液					ヤニ遊び		
42 ナンテン		地上部			鳥の造形				
43 モチノキ		樹液							鳥を捕る
44 シラタマホシクサ		茎		染色する					
45 不明	機織り主芋	根			イモの粘りで機織り				
46 イタドリ		葉・茎							食べる
47 スイカ		実							食べる
48 ノイバラ	いばら	実							食べる
49 スイバ	すいごめ	葉・茎							食べる
50 ナワシログミ		実							食べる
51 グミ		実							食べる
52 不明	たちうすまめ	実							食べる
53 ズミ		実							食べる
54 エビズル		実							食べる
55 アケビ		実							食べる
56 サルナシ	しらくち	実							食べる
57 不明	こまのまめ	実							食べる
58 ケンボナシ		実							食べる
59 オトコユウゾメ	ゆうぞめ	実							食べる
60 フジ		実							食べる
61 キイチゴ		実							食べる
62 ツタイチゴ		実							食べる

するという行為は子どもと自然との関わりにおいて少なくとも昭和30年頃までは中心的な行為のひとつだったと考えられる。しかし、現在では、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律等で鳥類の捕獲、飼育が禁じられている。魚類や昆虫を対象としても野生の生き物を捕獲することは容易ではない。生き物と真剣に対峙し、対象種の行動をつぶさに観察し、道具もまた工夫するといった試行錯誤を繰り返すことでようやく生き物を捕獲することができるようになる。対象とする生き物や自然環境との関わりの中で試行錯誤をする体験からその要領が少しずつ理解されていく。しかし、近年では保育士の自然体験の不足が指摘されている(岡崎・深谷, 2019)。そのため保育士となる学生が保育内容「環境」等の自然環境と関わる学びの中で、こうした野生の生き物や自然環境と試行錯誤しながら関わる体験を取り入れることについての検討が今後必要と考えられる。

次に、本書に見られた子どもと自然環境の関わりの方地域的な固有性について。本書では、“頭やじろ”を使った遊びが紹介されている。“頭やじろ”は、直筆原稿の挿絵からシラタマホシクサ(*Eriocaulon nudicuspe Maxim.*)と推定された(図1左)。シラタマホシクサは東海地方に固有な植物として環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類

に指定されている(環境省, 2020)。蛭川町は先述のように湧水湿地に恵まれた地域であることから、シラタマホシクサ(頭やじろ)の花茎を水に漬けて脱色し、他の植物で染色して遊ぶといった行為が記述されたものと考えられる。この他、蜜を吸う植物として挿絵にはサギソウ(*Pecteilis radiata (Thunb.) Raf.*)と推測される植物が描かれていた(図1右)。サギソウもまた東海地方に固有の植物であり環境省のレッドリストにおいて準絶滅危惧種に指定されている(環境省, 2020)。シラタマホシクサやサギソウは東海丘陵要素の植物群の一つとして知られ(富田, 2022)、生物多様性の保全の観点から重要な植物である。身近な草花の名前を覚え、草花遊びとして活用するとともに、地域の自然環境の固有性についても保育者が理解することで子どもと自然環境の関わりが持つ価値を発見する機会となるだろう。このように郷土資料を活用して地域の自然環境や子どもと自然環境の関わりを明らかにする取り組みは、保育者を養成するための学びにおいても実践することが可能である。

最後に、本稿で論じてきた子どもと自然環境の関わりにおける食べるという行為、地域の自然環境の固有性を保育に生かす取り組みとして「里山保育」と「散歩」について検討する。宮里(2023)

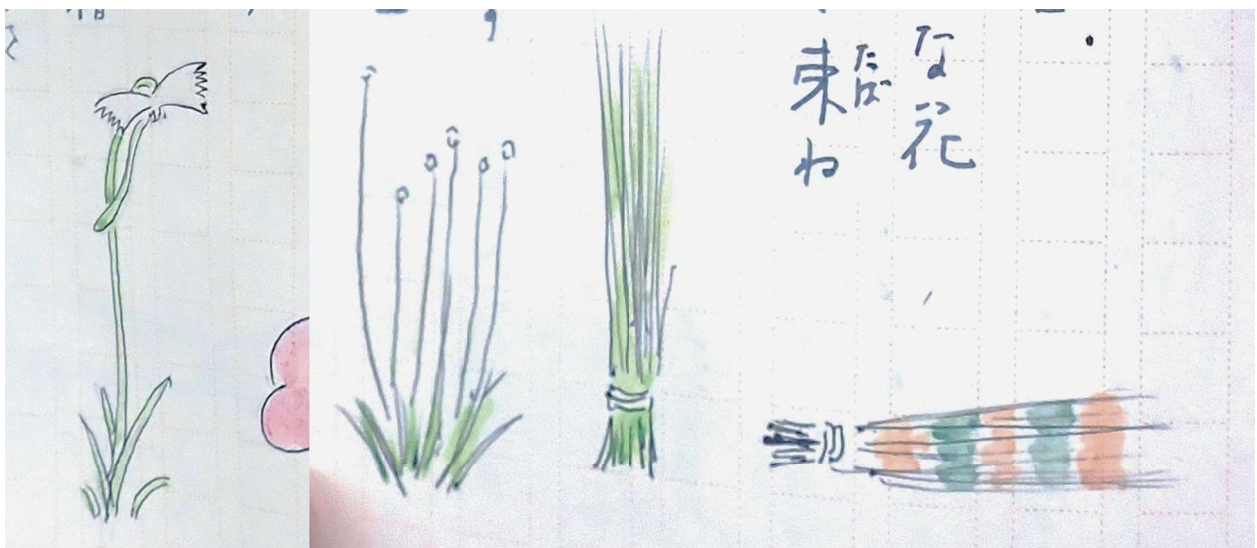


図1 「蛭川のくらしとならわし」の直筆原稿に描かれた挿絵(左: サギソウと推定される植物、右: シラタマホシクサと推定される植物)。蛭川郷土資料館より許諾を得て転載。

は、過疎地の里山の自然と暮らしに溶け込んだ保育を「里山保育」と位置づけ、散歩を中心とし、山や森の自然探索・地域の農業とつながり・「食」の探求・異年齢保育や地域の世代間交流を大切にする保育を提唱している。また、金子（2018）は、里山保育を実践する保育者の立場から、季節ごとに散歩先で収穫できる「すいかんぼ」・「ノビル」・「野いちご」・「ヨモギ」・「ムカゴ」・「ナツメ」・「たらの芽」・「三つ葉」など、地域の散歩先で収穫したものを利用した調理保育を計画的に行う実践を提案している。このように、保育者の知識向上と園内のコンセンサス、及び保護者との信頼関係を通して、自然を活かした“食”を通して、子どもたちが地域の自然環境と暮らしの相互的な関係性を経験する保育実践が報告されている。こうした実践に対し、本稿で検討した郷土資料に見られる子どもと自然環境の多様な関わりが示す地域性は、里山保育の基盤を成し、地域が有する潜在的な可能性を提供すると考えられる。

次に“散歩”は子どもが自然と関わる重要な機会であり、保育の5領域全てを満たす総合的な活動である（上月，2016）。散歩をより充実させるためには、地域を知り、散歩コースを探し、地域の方々とも関わりを深めることが求められる（横井，2023）。本稿で論じたように、郷土資料に見られる子どもと自然環境の関わり、そして動植物を食べる・利用するといった伝承と散歩が結びつくことで、地域と保育の新たな関わり方を創出することが可能となる。その発展した姿として、先に挙げた谷口（2020）が指摘する地域社会の文化や伝統を守る拠点としての保育所や幼稚園があると考えられる。

岐阜県東濃地域の保育には、少し足を伸ばし地域に目を向けることで、豊かな自然を保育の中に活かす機会に恵まれている。東濃地域の保育において、本研究が子どもと自然のより豊かな関わりを築くことができるよう、研究を継続していきたい。

VI. 謝辞

本研究の実施において、多大なご協力とご指導を頂いた蛭川郷土資料館職員の方々に心よりお礼申し上げます。また本稿の執筆に有益な助言及び示唆を与えてくださった匿名の査読者の方々にお礼申し上げます。

参考文献

- 岐阜県植物誌調査会編，（2019）．岐阜県植物誌．文一総合出版，東京．
- 蛭川村文化財審議会編．（1983）．蛭川のくらしとならわし．蛭川村教育委員会，岐阜．
- 蛭川村（1983）．集落のくらし～むらづくり活動から～．岐阜県恵那郡蛭川村・恵那農業改良普及書，岐阜．
- 加古里子（1967）．日本伝承のあそび読本，福音館書店．
- 金子久実（2018）．里山が育てる身体と心「お腹がすいて食べる保育」が教えてくれたこと．季刊保育問題研究，290号，pp.196-199．
- 環境省（2020）．レッドデータリスト．
<https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist>
（アクセス：2023年12月1日）
- 盛口満，当山昌直．（2020）．読谷村・古堅の動植物利用．沖縄大学人文学部紀要，（23），55-63．
- 宮里六郎（2023）．過疎地が輝くもう一つの保育 里山の保育．ひとなる書房，pp.12-13
- 岡崎善治，深谷博子．（2019）．保育内容「環境」における草花遊びの教育手法：発達心理学的な評価を通して．中京学院大学短期大学部研究紀要，50（1），47-55．
- 大仲尚也，笹井邦恵，田中綾，西村恵理子，新田茉穂，井上美智子．（2021）．子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る（11）田んぼビオトープによる園庭環境の発展．大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要，（11），109-140．
- 佐藤英文，藤野耕平（2012）．若い保育者の草花遊びと実践．鶴見大学紀要．第3部，保育・歯科衛生編，（49），pp.17-26．
- 渋谷香奈子，藤吉正明（2006）．環境教育のための草花遊びの重要性．東海大学紀要，教養学部，37，pp.213-225．
- 高橋そよ．（2022）．湧き水と生物文化多様性——琉球弧の事例から．学術の動向，27（1），1_50-1_55．
- 谷口一也（2020）．SDGs時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方．教育総合研究叢書，13，pp.137-146．

- 土岐市肥田町道徳推進協議会 (1992). ひだのあかり.
土岐市肥田町道徳推進協議会, 岐阜.
- 富永美香, 錦織誠子, 飯國佳代子, 川野圭子, 地下まゆみ. (2018). 食育と栽培を結ぶ保育実践. 大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要, (8), 91-100.
- 富田啓介 (2022). 「東海丘陵要素」の広範な学術分野および社会への受容と普及. 湿地研究, 12, pp.105-112.
- 上月智晴 (2016). 子どもにとっておさんぼって? 保育における散歩の意義と課題. ちいさいなかま, No634, pp.33-39.
- 山下久美, 首藤敏元 (2009). 幼稚園・保育園での虫飼育実践の提案. 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 8, 159-168.
- 横井喜彦 (2023). もっと!大事にしてほしい「さんぼ」保育が広がるきっかけに. ちいさいなかま, No738, pp.33-39.